2020.5.21

大草

読書メモ

138.ヘルベルト・ マルクーゼ「一次元的人間」河出書房新社（1980.5）

**＜マルクーゼ「一次元的人間」から＞**

『一次元的人間』（ One-Dimensional Man）は、[1962年](https://ja.m.wikipedia.org/wiki/1962%E5%B9%B4)に[ドイツ](https://ja.m.wikipedia.org/wiki/%E3%83%89%E3%82%A4%E3%83%84)出身の[哲学者](https://ja.m.wikipedia.org/wiki/%E5%93%B2%E5%AD%A6%E8%80%85)・[ヘルベルト・マルクーゼ](https://ja.m.wikipedia.org/wiki/%E3%83%98%E3%83%AB%E3%83%99%E3%83%AB%E3%83%88%E3%83%BB%E3%83%9E%E3%83%AB%E3%82%AF%E3%83%BC%E3%82%BC)によって著された哲学書である。副題は『先進産業社会におけるイデオロギーの研究』。マルクーゼは、1960年代以後の[新左翼](https://ja.m.wikipedia.org/wiki/%E6%96%B0%E5%B7%A6%E7%BF%BC)運動に対して思想的な影響を与えた哲学者。本書はその代表作のひとつである。表題の「一次元的人間」とは、現代社会において出現した[批判的思考](https://ja.m.wikipedia.org/wiki/%E6%89%B9%E5%88%A4%E7%9A%84%E6%80%9D%E8%80%83)を喪失した[人間](https://ja.m.wikipedia.org/wiki/%E4%BA%BA%E9%96%93)を指している。マルクーゼは、[理性](https://ja.m.wikipedia.org/wiki/%E7%90%86%E6%80%A7)の本質は所与の[現実](https://ja.m.wikipedia.org/wiki/%E7%8F%BE%E5%AE%9F)を克服するための「否定の力」であると述べ、[アメリカ](https://ja.m.wikipedia.org/wiki/%E3%82%A2%E3%83%A1%E3%83%AA%E3%82%AB)に代表される先進[産業社会](https://ja.m.wikipedia.org/wiki/%E7%94%A3%E6%A5%AD%E7%A4%BE%E4%BC%9A)においては、人間が[管理](https://ja.m.wikipedia.org/wiki/%E7%AE%A1%E7%90%86)システムのなかで既存の現実に同化する、一次元的人間（＝批判精神や自己決定能力を喪失した人間）になっていることを指摘している。

マルクーゼは、一次元的人間とは、[自由](https://ja.m.wikipedia.org/wiki/%E8%87%AA%E7%94%B1)や[個性](https://ja.m.wikipedia.org/wiki/%E5%80%8B%E6%80%A7)、[権力](https://ja.m.wikipedia.org/wiki/%E6%A8%A9%E5%8A%9B)に対する批判や[自己決定](https://ja.m.wikipedia.org/wiki/%E8%87%AA%E5%B7%B1%E6%B1%BA%E5%AE%9A)を行う能力を喪失した人間と特徴づけ、彼らは人間の願望や[理念](https://ja.m.wikipedia.org/wiki/%E7%90%86%E5%BF%B5)、[欲求](https://ja.m.wikipedia.org/wiki/%E6%AC%B2%E6%B1%82)を操作する一次元的な社会のなかで埋没したものであると見なす。一次元的人間が誕生した背景について、[科学技術](https://ja.m.wikipedia.org/wiki/%E7%A7%91%E5%AD%A6%E6%8A%80%E8%A1%93)への信仰と合理性の[イデオロギー](https://ja.m.wikipedia.org/wiki/%E3%82%A4%E3%83%87%E3%82%AA%E3%83%AD%E3%82%AE%E3%83%BC)、さらに[広告](https://ja.m.wikipedia.org/wiki/%E5%BA%83%E5%91%8A)で宣伝される[大衆文化](https://ja.m.wikipedia.org/wiki/%E5%A4%A7%E8%A1%86%E6%96%87%E5%8C%96)と、それによってもたらされる[消費](https://ja.m.wikipedia.org/wiki/%E6%B6%88%E8%B2%BB)至上のイデオロギーが、かつて[資本主義](https://ja.m.wikipedia.org/wiki/%E8%B3%87%E6%9C%AC%E4%B8%BB%E7%BE%A9)社会においても絶対的な否定勢力として存在してきた労働者階級すらを社会の体制に組み込んでしまったとし、これらが資本主義体制を盤石化し、変革を抑制し続けていると説く。

マルクーゼは、このような先進社会においても管理されていない少数の[アウトサイダー](https://ja.m.wikipedia.org/wiki/%E3%82%A2%E3%82%A6%E3%83%88%E3%82%B5%E3%82%A4%E3%83%80%E3%83%BC)、[マイノリティ](https://ja.m.wikipedia.org/wiki/%E7%A4%BE%E4%BC%9A%E7%9A%84%E5%B0%91%E6%95%B0%E8%80%85)が新しい否定の力を担うことを期待している。

（革命ではなく漸進的進化へ）

資本主義の発展は、このブルジョアジーとプロレタリアートの階級の構造と機能を、もはや歴史変革の主体とは思われないようなものに変えてしまった。制度化した現場の維持・改良に対する何ものにも増して強い関心は、現代社会の最も進んだ領域で、かつての敵対者を結びつけている。その上、技術の進歩が共産主義社会の成長と団結を保証するにつれて、質的変革の観念そのものが、漸進的進化という現実主義的概念に屈服する。はっきり指摘できる社会変革の主体と推進力が欠如しているために、批判は高度に抽象的な水準へと後退させられる。理論と実践、思想と行動が出会う基盤は全く存在しない。（11頁）

（技術・科学・機械による支配）

今日、政治権力は生産機構の機械操作と技術的組織を支配することによって、その地位を確保している。先進産業社会および発展途上の社会の政府は、産業文明の発達に役立つ技術的・科学的・機械的な生産力を動員・組織・開発することに成功しない限り、その地位を維持し安定化することができない。そしてこの生産力は、どのような個人ないし集団の利害をも超えて、全体としての社会を動員する。機械の物理的な力が、個人の力よりも、また多くの人々からなるどの集団の力よりもまさるという無情な事実のために、機械操作によってその根底が組織されている一切の社会において、機械は最も有効な政治の道具となる。しかし政治の趨勢は逆転させることが可能だ。もともと機械の力とは、人間の力が蓄えられ、投企されたものにすぎない。労働世界が一個の機械と解され、その結果、機械化されるようになると、それにつれて労働世界は人間のための新しい自由の潜在的な基盤となる。（21頁）

　現代の産業文明が示しているところでは、この文明は、もはや伝統的な経済的自由、政治的自由、精神的自由の概念によって「自由な社会」を適切に定義するということができない段階に達している。これは、それらの自由が重要でなくなったからではなく、伝統的形態の枠内に制限しておくには、あまりにも重要になっているからである。社会の新しい能力に対応して、自由の新しい現実化の仕方が必要とされている。（22頁）

（解放をおしとどめる力――時代遅れの生存競争の形態を長引かせること）

経済的自由は、経済からの――経済的な諸力と諸関係によって統制されている状態からの自由、――すなわち日々の生存競争からの自由、生活を稼がねばならない状態からの自由を指すことになろう。政治的自由は、人々が自分たちの手では効果的に制御することができない政治から解放されるということを意味することになろう。同様に精神的自由は、現在のところマス・コミニケーションと大衆の教化に吸収されている個人の思想を取り戻すこと、「世論」を、その作り手も含めて廃棄することを意味するであろう。これらの叙述が非現実的な印象与えるとしても、それはここで言われていることのユートピア的な性格を示しているのではなく、その実現を妨げている諸力の強さを示しているのである。解放をおしとどめようとする最も効果的で長持ちするやり方は、時代遅れの生存競争の形態をいつまでも長引かせるような物質的・精神的欲求を、人々の心を植え付けることである。（22頁）

（社会の抑圧的な管理が諸個人の解放を妨げる）

社会の抑圧的な管理が合理的・生産的・技術的及び全体的になればなるほど、管理されている諸個人がその隷属状態を突き破って自己の解放を達成する手段や方法は、ますます想像しがたいものとなる。確かに社会全体に理性を押し付けようとするのは、逆説的で顰蹙を買う考えではあるが、しかしこの考えを嘲笑しながら、一方で人々を全面的管理の対象に仕立てているような社会の正しさというものは反駁されよう。あらゆる解放は隷属を自覚することに基づいており、この自覚の発生を妨げるものは、いつの場合にも、すでにその大部分が個人自身のものとなっている欲求と満足の支配的な力である。解放のプロセスはいつの時代にも、先行する条件付けのシステムを別のそれに置き換えるのであって、その最高の目標は、虚偽の欲求を真実の欲求に置き換えること、抑圧的な満足を廃棄することにある。（25頁）

（全体主義の下での自由は支配の道具である）

抑圧的な全体の支配下では、自由は支配の強力な道具となり得る。個人に開かれている選択の余地は、人間的自由の度合いを決める決定的な要因ではなくて、何が個人によって選ばれうるか、また何が実際に選ばれているかが、その決定的な要因なのである。自由な選択であるための基準は、唯一絶対的なものではありえないが、しかし完全に相対的なものではない。主人を自由に選んでも、主人または奴隷がなくなるわけではない。非常に多様な商品やサービスが苦役と恐怖の生活に対する社会統制を持続させるなら――すなわちそれらが疎外を持続させるなら――、それらの商品やサービスのなかからも自由な選択は、本当の自由であるとは言えない。また強いられた欲求を個人が自発的に再生産しても、自律性が形成されはしない。それは統制の有効性を証明しているに過ぎないのである。（26頁）

（オートメーション化のテクノロジーは人々の才能の開花を促進する）

「進歩」は中立的な用語ではない。それは特定の目的に向かって進むものであり、この目的は、人間の境遇を改善する可能性によって定められる。先進産業社会は、連続的進歩が支配的な進歩の方向と組織の根本的な変革を要求することになるであろうような段階に近づきつつある。この段階に到達するのは、すべての基本的欲求が満足できて、しかも必要労働時間はごくわずかの断片的時間にまで減少されるというほどに、(必要なサービスを含む）物質的生産がオートメーション化するときである。この時点から技術の進歩は必然の王国――それまで、技術の進歩が支配と搾取の道具として役立ち、それによってその合理性が制約されていた領域――を超越するであろう。テクノロジーは、自然と社会の平和を回復するための闘いにおいて、人々の才能を自由に開花させるのに用いられるようになるであろう。このような状態は、「労働の廃棄」に関するマルクスの見解のなかで想定されている。しかし、――規制社会内部の矛盾を変形し、一時停止させるところの国際的紛争を通じて――世界戦争の瀬戸際に進んでいく世界のもう一つの歴史的選択を差し示すためには、「生存の平和回復」という用語がよりふさわしいように思われる。「生存の平和回復」とは、相争う欲求、願望、抱負が、支配と欠乏を利益とする既存の権力――人間および自然に対する闘争の破壊的な形態を永続化する体制――によってもはや組織されないという条件のもとで、人間および自然に対する人間の闘いが発展するということを意味する。（34頁）

（テクノロジーは革命後も続きさらに発展する）

古典的なマルクスの理論は、資本主義から社会資源の移行を一種の政治革命として捉えている。そのうちプロレタリアートは資本主義の政治的機構を破壊するが、しかしテクノロジカルな機構については、これを保持し、そしてこれを社会化させるのである。革命の連続面があり、テクノロジカルな合理性は、非合理的な制約と破壊から解放された後、新しい社会の中で自己を維持し、完成させる。この連続面についてあるソビエトのマルクス主義者が述べている意見を読んでみることは興味深い。それは資本主義の明確な否定としての社会主義という観念にとって、極めて重要なものである。（41頁）(大草：テクノロジーは革命後も存続し、加速度的に発展し続けるといっていることを指している）

（先進産業社会において労働者の生活と労働意識が変化した）

現在、先進資本主義の下でますます完全なっていく労働の機械化は、搾取を維持しながら、搾取されている人々の態度と地位を変化させる。テクノロジカルな全体の内部には、自動的・半自動的な反応が労働時間の大部分を占めるような機械化された労働が、生涯にわたる仕事として、消耗させ、麻痺させる非人間的な苦役として存在している。それは以前よりいっそう消耗させるものだ。なぜなら、ますますスピードアップが進み、機械を扱う者の監督が強化され、労働者相互の孤立も増すからである。（44頁）

この種の巧妙な隷属化は、タイピスト、銀行の金銭出納係、仕事のセールスマン、テレビのアナウンサーなどの隷属化と本質的に異なったものではない。（45頁）

マルクーゼは、テクノロジーの進展に伴ってオートメーション化が進み、労働のあり方も大きく変わったという。これに伴いブルーカラーもホワイトカラーも同様に労働に対する意識が産業革命当時と全く異なり、階級としての意識も薄れていったと指摘している。マルクーゼは、先進産業社会の変化と労働者の意識の変化を詳細に分析している。

（先進産業社会における諸階級の変化――ホワイトカラーと自由時間の増加など）

産業文明の進んだ分野における諸労働階級は決定的な変容を経験したが、この変容の要因は次の４つである。

(1 ）機械化は、労働に費やされる肉体的エネルギーの量と強さをますます減少させていく。先進資本主義のもとでますます完全になっていく労働の機械化は、搾取を維持しながら搾取されている人々の態度と地位を変化させる。肉体的エネルギーの技術的、精神的な技能への変換がなされた。

(2)基幹産業部門では、ブルーカラーの作業にも比重がホワイトカラーのそれに比べて減退し、非生産労働者の数が増加している。機械が労働者の職業的自律性を弱め、労働者を他の職業（管理したり、技術的な指導をする職業など）のもとに統合していくことになる。

(3)作業の性格と生産用具における変化は、労働者の態度と意識を変える。労働者階級が資本主義社会へ社会的・文化的に統合されてしまう。資本主義企業への労働者の参加という形がとられるようになり、労働者達がその企業体に帰属する意識を持つようになった。

(4 ）新しいテクノロジカルな労働世界では、資本家たちは経営と監督による管理者へと変身する。また、労働者階級は、テクノロジーの進展による労働の軽減などにより階級意識が希薄となる。（43頁～51頁）

オートメーションは、先進産業社会の重要な触媒であるように見え、労働の量から質への移行の技術的道具となる。オートメーションが完成すれば人間の私的でしかも社会的な生活が実現する次元としての自由時間の次元が広がるであろう。これは新しい文明に向かって、歴史的転換となろう。（54頁）

ホワイトカラーの諸集団は産業別労働組合に組織される傾向にあるが、ホワイトカラーたちは政治的急進化をすることはほとんどありえない。ホワイトカラーたちは、すでに先進産業社会を支える構成員となっているからである。

（民主主義は最も効果的な支配体制である）

多元主義の現実は、イデオロギー的で欺瞞的なものとなる。それは操作と等質化を減らすよりは強めるように思われる。決定的な統合に逆らうよりはむしろそれを促進するように思われる。自由な諸制度は、権威主義的な諸制度と競って、政治体制内の致命的な勢力にする。そしてこの致命的な勢力は生長と創意を刺激する。――防衛部門の大きさや経済的影響によってではなく、全体として社会が一個の防衛社会となるという事実によって、そうする。なぜなら、敵は永久的な存在だからである。それは非常事態の中に存在するのではなく、ごく正常な事態の中に存在する。それは平時にも戦時にも脅威を与える。こうしてそれは、凝集力として、体制のなかに組み込まれているのである。

　増大する生産力も高い生活水準も外部からの脅威には左右されない。しかし社会変革の抑制と隷属状態の永続化のためにそれらを利用する状態は、外部からの脅威によって左右される。敵はあらゆる行動の公分母である。そして敵は現実の共産主義ないし現実の資本主義とは一致しない。――どちらにあっても、敵は解放という真の幽霊なのである。

　繰り返して言えば全体の狂気は個々の狂気を許し、人道に対する罪を合理的な企てへと変える。人々が公的・私的なその筋からうまく刺激されて全体的な動員の生活を覚悟するとき、彼らは、当面する敵のためにばかりではなく、産業や娯楽における投資と雇用の可能性のためにも敏感になる。もっとも気違いじみた計算さえも合理的になり、五百万人を絶滅させることは、一千万、二千万人を絶滅させることより好ましいとされる。このような計算によって自己の防衛を正当化する文明はそれ自身の終末を示している、と論じても仕方がない。

多元主義の現代的形態は、質的変革を抑制する潜在的能力を強化し、それによって自己決定の「カタストローフ」を強いるよりはむしろ妨げるであろう。民主主義は最も効果的な支配の体制であることになろう。（68頁～69頁）

（資本主義と共産主義は平和を望み共存する）

現在の共産主義社会においては、外からの敵と後進性とテロの名残りとが、資本主義の業績に「追いつき追い越す」という抑圧的特徴を永続化している。それによって目的に対する手段の優位が助長されるが、その優位は平和回復が達成されなければ打破することができないものなので、資本主義と共産主義とは、全世界的な規模で、全世界にわたる制度を通じて、軍事力に訴えない競争を続けることになる。この平和回復は真の世界経済の出現を意味するであろう――すなわち国民国家、国民的利益、国家企業ならびにそれらの国際的同盟の没落を意味するであろう。そして、世界の現在の世界はまさにこの可能性と戦うために動員されているのである。（70頁）

現代社会におけるただ二つだけの「主権的な」社会体制の決定的相互依存は、進歩と政治の衝突、人間とその主人との衝突が全体的になっているという事実を表現している。資本主義が共産主義の挑戦に直面するとき、それは自らの可能性に直面しているのである。すなわち生産力の発展を阻止している私的利潤への関心が斥けられた後に、一切の生産諸力がめざましく発展するという可能性に直面しているのである。共産主義が資本主義の挑戦に直面するときも、それはやはり自らの可能性、すなわち豪華な楽しみ、様々な自由、および生活苦の軽減に直面しているのである。二つの体制に含まれているこれらの可能性は、識別できないほど歪められているが、どちらの場合にも、その根拠となるものは結局のところ同じもの――つまり支配の根底を突き破るような生活形態に対する闘争なのである。（71頁）

アメリカの自動車労働組合連合の指導者の発言は参考になる。「我々が求めて戦ったすべてのものは、今や会社が労働者に与えている。、、、我々が見出さねばならぬものは、労働者が欲しながら雇用者側が与えようとしない別のものである。、、、われわれはこれを探し求め続けている。」（73頁）

資本主義的生産は剰余価値の私的な獲得・占有のために私的な資本を投下することによって行われる。資本は、人間を人間が支配するための社会的な道具である。このプロセスの本質的諸特徴は、株主の拡散、所有と経営の分離などによっていささかも変えられることはないのである。（73頁）

（歴史における真理性）

歴史的投企の真理性は事後の成功によって、つまり、それが社会に受け入れられ実現されたという事実によって確証されるのではない。ガリレオの科学は、それがいまだ断罪されていたときにも真理であったし、マルクスの理論は共産党宣言の時代にすでに真理であった。ファシズムは、それが国際的規模で上昇しつつあるときにもやはり虚偽である(「真理」といい「虚偽」というのは、常に先に規定した歴史的合理性の意味においてのことである）。今日にあっては、全ての歴史的投企が資本主義と共産主義という二つの相争う全体性に両極化されてしまう傾向がある。その結果は、二つの対立的な諸要素――(1）より大きな破壊力、（2）破壊抜きのより大きな生産力――にかかっているように思われる。換言すれば、より高い歴史的真理性は、平和回復のより大きな機会を与えてくれる体制のものだということになるであろう。（247頁）

（まとめ――批判的思考を喪失した人間に希望あり）

本書「一次元的人間」は、まさしくアメリカを典型とする高度に工業化、技術化した資本主義社会、「先進産業社会」の「イデオロギーの研究」であって、その社会と思想状況の批判的分析である。「一次元」の社会といい、「一次元」の思想というのは、「二次元」的対立・拮抗・緊張の喪失状態にある全体主義的管理社会の有りようを指摘したものにほかならず、そこにおける既成的現実への埋没からの脱出、真の人間解放の可能性が「もう一つの選択の道」として示唆されているわけである。批判的理論の本質が「否定的思惟」の回復を説きうるのみで、ユートピア的なものであり、またそうあらざるを得ないことが、本書の末尾には自覚的に提示されている。（285頁）

「希望なき人のためにのみ、我々には希望が与えられている。」（W・ベンジャミン）

**＜意見交換のテーマ＞**

3月の読書メモ(樺俊雄「現代における人間疎外」）において、マルクーゼのニューレフト思想と労働観を引用文で取り上げた。この樺氏解説のなかに、「マルクーゼは、①「疎外された労働の廃棄」とは労働が同時に遊びでもある状態になることである。②自由な社会としての社会主義社会の下では、労働の質と量の面で理想的な労働が生まれる。」と説かれている。そこで、マルクーゼの代表的著作である「一次元的人間」を読み、労働と遊びの融合した理想的な労働という労働観を研究することにした。残念ながらこの本には、労働と遊びの融合した理想的な労働ということについての記述はなかった。しかし、高度のオートメーション化により労働時間の短縮と単純作業からの解放により労働の質の向上が図られてきたことが説明されている。

１．現代の資本家と労働者との階級対立についてどう考えるか？

　マルクスが指摘した資本家と労働者との階級対立は、先進産業社会ではなくなったとマルクーゼはいう。この点についてどのように考えるか。

（キーワード：共産主義の崩壊、資本主義の終焉、福祉国家、社会主義的施策）

２．米中はなぜ国際協調しないのか？

　米中は、新型ウイルス拡散の原因が相手国にあると批判・攻撃している。なぜ国際協調しないのか、できないのか？

以上